

志異雑記

田中克己

蒲松齡の「聯齋志異」を愛しだしたのはいつのことだろう。物覚えのわるいわたしは柴田天馬さんの訳で読みだしたやうに思つてゐたが、このごろ調べてみると、柴田さんの初

訳は大正八年玄文社発行であるが、どうもこれではないやうだ。第一書房から出た初刊本（大正十五年刊）はどこかで見た記憶はあるがそれはのちのこと、昭和八年の刊行本はすぐ発禁となつたといふから、見ないにちがひない。するとわたくしは先師佐藤春夫先生が「玉簪花（大正十二年刊）」にお収めになつた「緑衣の少女」以下を春夫選集か何かで読んで好きになつたに相違ない。ともかく昭和二十年、兵としてシナにゆき、帰つて来たわたくしはさつそく聊齋志異を訳しはじめ、当時まだ元氣だつた文淵堂金尾種次郎氏に、父を通じて出版をたのんでもらつたところ「志異よりも杜甫伝を」といふことで、止むを得ず杜甫の伝記を書いて京都へ送つた。

残念なことには金尾さんはこの原稿を受取るとすぐ死んで（昭和二十二年一月）、原稿はわたしのもとへ帰され、その後これも関西の某出版社で出してくれることになり、三校まで進んだが、出版社の経営が怪しくなつたとかで、校正刷のまゝわたしの手許に残つてゐる。

志異の方はふしぎと運がよく、二十三年十一月に養徳社から刊行された。四六判一七五ページで、もとより選訳、初めの方の十六篇より成り、中で「嬰寧」といふのが一等好きだと序文に書いてゐる。その後は志異そのものとはとんと関係がないが、中国文学史概説を十年間講じてゐるので、「何かよんでごらん」といひ「何を」と問はれると「志異などはどうか」といふことが多かつた。今年も偶然に同じ手順をふんで、本当に志異をよんだといふ学生にぶつかつたので、「どうだつた」と聞いてみたら、答は意外にも「つまらなかつた」とのことであつた。わたしは愕然としてものもいへなかつたが、よく考へてみると、志異をつまらないと断言してゐる

る専門家があつたのに気がついた。都立大学の松枝茂夫教授であつて、なんとしてもよむ気がしない趣をこまごまと書いておいである（昭和二十三年白目書院「中国の小説」所収「醒世姻縁伝の話」）。ただし同処にはわたしと同じく中国文学へ志異から入つて行つた方があつて、九大の目加田誠教授で、その最も愛されるのが、同じく「嬰寧」だと明記してある。しかし知己を得たといふ喜びよりも、松枝教授のお気持の方が今のところ気になつて、今後は志異をすすめるのは止さうと思つてゐる。

これも余談だが、志異の刊行は作者の死後五十余年めの乾隆三十年（一七六五）、湖北の王氏の刊本が出、翌年また浙江趙氏の刊本が出たといふから、將軍家治の明和二、三年のことになる。秋成の「雨月物語」の出る直前だから、秋成にはとられなかつたのは当然としても、江戸時代を通じて誰にも読まれなかつたらしいのはふしぎである（石崎又造「近世日本に於ける支那俗語文学史」ならびに麻生磯次「江戸文学と中国文学」参照）。

読まれ出したのはさうすると柴田天馬「聊齋志異研究」に見える日夏耿之介氏の説では「明治卅八、九年の交の独歩社刊支那奇譚集」で、芥川竜之介もこれで志異を知つたとのことである。江戸文学と大正文学との落差が原因だらうか、それとも渡来がこんなにおくれたのであらうか。これは宿題としてわたしも考へようと思ふ。

二

ここでちよつと志異からはなれるが、松枝教授が、いやいやながら読んで、「いろいろな意味で非常に面白く感じてとらう／＼おしまひまで読み」通された「醒世姻縁伝」であるがこれは「西周生輯著、然藜子校定」といふ署名のみしか刊本になく、作者は不明だつたのが、民国二十年胡適の詳密な研究により志異と同じく蒲松齡の著と証明された。胡適の研究はこの長篇が志異中の「江城」と筋書が全く同じだといふのであつて、これを事こまかに論じてゐるが、相違点は江城の悪妻が前生の悪因縁からで、ある日、老僧の一喝によつて全く人がいれかはずたやうな良妻となる点だが、姻縁伝の藤素姐、童寄姐ともに悪人のままで終つてしまふ点である。どちらが宜しいか、どちらが先か、わたしにはこれまた不明である。宿題がまた一つふえたわけである。

ただし近刊（一九六二年上海中華書局）の路大荒編「蒲松齡集（二冊）」の「編訂後記」には

「わたしは過去に努力して蒲氏の遺著をすべて収集し、上海世界書局にわたして出版せしめ、名を『聊齋全集』と定めたが、該書局は来源不詳の鼓詞やなほ未だ蒲氏撰作かいなか考定し得ない『醒世姻縁』などをまじへて出版した。これは実に遺憾である。…そこで一九五三年の冬、周、楊同志が濟南に來たとき、わたしを鼓勵して重ねて新たに整理せしめた」との記述がある。そのくせこの下冊には江城を主人公とした

悪妻もの「裏妬児」三十三回が収められてゐて、これは志異の「江城」とはもとより、「醒世姻縁」とも大同小異である。あるひは胡適への政治的反感からかういふことになつたのではないかと疑はせる。路大荒の名はわたしにとつて初めてでない。前に述べた聊齋志異抄訳の翌年（昭和二十四年）かに、わたしは京都女子大学に招かれて「志異のロマン性」といふ講演を行なつた。その時、おいでだつた平井雅尾国手から「聊齋遺稿・聊齋遺跡（昭和十五年、釜山刊）」をいただいて、いろいろ教へられた。その中に収められた年譜は国手が淄川においての時親しかつた淄川県図書館長兼体育会長の路氏の作成になるもので、わたしはたびたび閲して、多少の誤を発見したが、それはこの度の「蒲松齡集」の年譜では改められてゐる。改められた箇所はおほむね正しくなつてゐるが、先ほど述べた「醒世姻縁伝」に關してだけは頑として改められないのである。とまれどんな点が改まつたか、この勞作から抜き出してみよう。

・ 明崇禎十五年壬午（一六四二）先生三歳
「摯友李堯臣生」を附加

・ 清順治四年丁亥（一六四七）先生八歳

「父敏吾与叔父祝饗冠遭難」を除去

・ 順治八年辛卯（一六五一）先生十二歳

按じて父堯の死はこの年でなく康熙元、二年間にまだ存世とし、他日の検討を俟つといふ。

・ 順治十五年戊戌（一六五八）先生十九歳

生員となつたが、「試験官は施閔章」と。

・ 順治十六年己亥（一六五九）先生二十歳

「同邑王鹿瞻、李希梅、張篤慶と鄂中詩社を結ぶ」を附加

・ 康熙三年甲辰（一六六四）先生二十五歳

「是年李希梅（堯臣）家にて読書す」とあり李氏の家が醒軒と号したことを記す。

・ 康熙十年辛亥（一六七一）先生三十二歳

前年より幕賓となつてゐた孫蕙が「三月高郵州に転任、ともに赴く」を加へ、秋、「帰郷」を附加。

・ 康熙十一年壬子（一六七二）先生三十三歳

「畢際有の家に館す」と「第三男笏生」を附加

・ 康熙十二年癸丑（一六七三）先生三十四歳

「是年新城王士禎卒」を「王士禎卒」と改む。

・ 康熙十四年乙卯（一六七五）先生三十六歳

「三男笏生」を「第四男筠生」と訂正

・ 康熙十八年己未（一六七九）先生四十歳

「志異書、是年大体已成」に附加し、「後統者も頗る夥く、『狐夢』は康熙二十一年の事、『上仙』『花神』はともに二十二年の事、『夏雪』は四十六年の事」と記す。

・ 康熙十九年庚申（一七八〇）先生四十一歳

是年「上諭儒臣纂修太祖高皇帝、太宗文皇帝、世祖章皇帝実録告成、羣臣進表」に擬する文などあり。

・ 康熙二十年辛酉（一七八一）先生四十二歳

「上以天下蕩平、賜羣臣宴、賞賚綬足有差、羣臣賀表」

に擬する文あり。三藩の乱の平定を賀す。

。康熙二十一年壬戌（一六八二）先生四十三歳

（廩生となる）

。康熙二十二年癸亥（一六八三）先生四十四歳

「上簡施琅為福建水師提督、台湾蕩平羣臣謝表」に擬する文あり。台湾の鄭氏の降服を賀す。「婚嫁全書」成る）長孫立憲生る。

。康熙二十三年甲子（一六八四）先生四十五歳

（「帝京景物選略」成る）。「省身語録」成る。

。康熙二十四年乙丑（一六八五）先生四十二歳

王士禛父の喪によつて辭任、新城（いま桓台県）に帰郷。濟南の郷試に越幅により落第。

。康熙二十七年戊辰（一六八八）先生四十九歳

（族譜を作る。長男若生員となる）

。康熙二十八年己巳（一六八九）先生五十歳

王士禛の「池北偶談」成る。十月、王士禛喪あけて帰京。

。康熙二十九年庚午（一六九〇）先生五十一歳

濟南の郷試に応じ落第。

。康熙三十一年壬申（一六九二）先生五十三歳

次兄兆専卒す。

。康熙三十五年丙子（一六九六）先生五十七歳

（「懷刑錄」成る）

。康熙三十六年丁丑（一六九七）先生五十八歳

（「小学節要」成る）「宋七律詩選」成る

。康熙四十年辛巳（一七〇一）先生六十二歳

王士禛請假帰郷

。康熙四十三年甲申（一七〇四）先生六十五歳

（「日用俗字」成る）。王士禛、免職帰郷

。康熙四十四年乙酉（一七〇五）先生六十六歳

（「農桑經」成る）次男効、四男錫生員となる。

。康熙四十五年丙戌（一七〇六）先生六十七歳

（「葉崇書」成る）

。康熙四十八年己丑（一七〇九）先生七十歳

（兄柏齡卒す）

。康熙四十九年庚寅（一七一〇）先生七十一歳

歳貢生となる。この年より家居す。

。康熙五十年辛卯（一七一）先生七十二歳

父の為に墓碑を建つ。王士禛卒す。長孫立德生員となる。

。康熙五十二年癸巳（一七二三）先生七十四歳

（妻劉氏死す。肖像画成る）

。康熙五十四年乙未（一七二五）先生七十六歳

（正月二十二日酉時卒）

カツコ（）内はもとのまま

この年譜を見て怪訝に感じられるのは、墓表に享年七十六歳とありながら、碑陰には崇禎十五年生として、七十四歳であるかの如く記載してゐることであるが、これは早く夫人の生年崇禎十八年（崇禎は十六年までしかない）とともに石匠の誤とされてゐる。また怪しむべきは附記雜著五冊として、

「省身語録」「懷刑録」「曆字文」「日用俗字」「農桑經」だけを挙げ、「醒世姻縁伝」はもとより志異をも載せてゐない点である。しかし、いまの「蒲松齡集」には四男七孫二曾孫の名を列した「蒲笏等祭父文」が録されてゐて、康熙五十四年三月二十三日の祭文で、志異を「暮年の著」としるしてゐる（ただし姻縁伝は挙げられない）。さらに惜むべきは、康熙二十七年に作つたといふ族譜がのらず、代りに「世系表」がつてゐるが、これには臻以下しか記されてゐない。平井氏前掲書にのせる「蒲氏族譜般陽土著」によれば蒲氏は始祖璋以下がしるされてゐて、臻はその五代目、六世の永祥は「暮年挙善徳於郷」と世系表に見えて、蒲松齡と同じく晩年に生員となつたやうであるが、蒲氏の文学はその子世広、すなはち松齡の玄祖からはじまると世系表に見えてゐる。その子継芳が生員となり、孫には玉田県知県となつた生汝があるが、松齡の祖父生炳はその兄である。そんなことよりもわたしに最も興味深いのは平井氏の著に記す蒲家廟存置の牌位であつて元般陽路総管蒲公諱魯津と同諱居仁とが見えてゐることである。般陽は元代の淄川の称であるが、総管は元代に達魯哈赤とともに路の長官だつたのである。蒲居仁の名は実は桑原隲藏博士の「蒲寿庚の事蹟（昭和十年岩波書店刊）」に見えてゐて（一八七ページ）、元の晋宗の泰定年間（一二三二—一二三三）に福建等処都転運塩使といふ正三品の大官になつたもので、或は蒲寿庚の孫ではなからうかと博士は疑つてをられる。もしこの人と蒲松齡の遠祖とが同名異人でなければ、そ

れより上に牌位を置かれた蒲魯津はその父で、蒲寿庚の子となるわけである。前に述べた京都女子大学の会場で、神田喜一郎博士は蒲松齡の先祖はアラブではあるまいかと述べられた。御論拠はおぼえてゐないが、その作品がロマンチックなのもその一証とされたかと思ふ。蒲寿庚との血縁はともかく、元末の蒲居仁以後は仕えることもなくなつたのは、桑原博士によれば「明の太祖が元に代つて天下を一統すると……この元と姻縁深き福建の蒲姓の一族の仕官を禁じた」（前掲書一八八ページ）からではなからうか。「般陽土著（蒲氏族譜）」に始祖とする璋は明の洪武年間の人とあるから、蒲氏を称することにも憚りがあつたであらう、路大荒編の年譜のはじめには、「相伝元代傾覆之余、祇遺藐孤、易姓更名、養於外家楊氏、至明洪武中、始復姓蒲、故蒲氏之興、自洪武始也」といつてゐるが、これは桑原博士の説を裏書きする。ただし洪武（一三六八—一三九八）は明の太祖の年号であるから、易姓更名したのは蒲居仁と蒲璋の二人であるか、もしくはその間の人でなければならぬ。明末その住まふ滿井莊に蒲姓が多くなつたので蒲家莊と改めたといふ。蒲氏が先祖を忘れたのは漢人の蒲姓に対する憎悪忘却と同時にであつたらう。ただアラブの血統が一夜物語にも比すべき（ただしハルン・アル・ラシッドの宮中などバグダッドにも比すべき北京の繁盛はほとんど見えないが）ロマンチックな話を聊ねる志異を生ましめたのみならず、松齡の自筆になる世系表では玄祖世広の伝記として

公少聰慧、方冠當時。如擲錢為六豐之戲、常坐堂中、令婢拾供之、六錢不溢一磚、必得四幕無訛、遂為絕技

とあつて、博奕にたけ、のち族人で賭博に負け、その田宅をみな質にとられた者があると、相手である竜興寺の僧のところへ行つて、みるみる負けをとりかへし、大言して帰つたことを記してゐる。アラブの商才がなほ父繫にも伝はつたことは

公少力学而家苦貧、操童子業、至二十余不得售、遂去而賈。數年間、郷中稱為素封。然權子母之余、不忘經史……と同じく世系表に記されてゐる。

この人を父とした蒲松齡がただにロマンチックなのみで、実利にうかつたことは、その妻劉氏のことを記した「述劉氏行実」にもよく記されてゐるほか、「除日祭窮神文」「窮神答文」にユーモラスに記され、「学究自嘲」(下集一七三八―四三ページ)の十二月に分れた小曲にも、四時貧乏の先生として詠じられてゐる。たとへば

七月有七夕

七夕には七夕あり

七月有七夕

七月には七夕あり。

織女本是牛郎妻

織女はもとこれ牛郎の妻

他二人也有团圞期

他ら二人は也た团圞の期あり。

館舍孤寂

館舍 孤寂なり

館舍孤寂

館舍 孤寂なり。

白面書生正慘悽

白面の書生は正に慘悽

算今生大半是鰥居

今生を算ふれば大半はこれ鰥居。

紅顏嬌妻

紅顏の嬌妻

有夫守寡他怎知

夫ありて寡を守るも他いづくんぞ

知らん

到不如田舍翁常相依

田舍翁の常に相依るに如かざるに

到る。

離恨誰知

離恨 誰か知らん

離恨誰知

離恨 誰か知らん

雙鯉難伝尺素書

雙鯉 伝へがたし尺素の書

買張紙訴不尽相思意

張紙を買ひて訴へん尽きざる相思

の意。

といふのが、家庭教師の七月を詠じた曲であつて、註して

人生楽在家庭、做師傅豈無情。只因八字生前定、紅顏有

夫常守寡、書生有妻伴孤灯、黄卷有女美如玉、綵然窈窕

亦是空

といつて、家庭教師は妻を家においてゐるので孤独であるこ

とをいふ。彼が妻のことを記した前掲「述劉氏行実」にも夫

が七十歳でやつと他遊しなくなつたといつてゐるが、他遊の

理由は外でもない。「皇清勅封儒人進階宜人畢母王太君墓誌

銘」に見えてゐる「余与畢世兄仲同食三十年」といふ句が示

すやうに、畢際有の家に家庭教師となり(康熙十一年)、三十

年これをつづけ、家に帰るのは時々だつたからである。際有

は明の尚書自巖の子、順治二年の貢生で、家が富み、その夫

人王氏も臨清の王家豊といふ富家の出であつた。三子の中、

長男、三男は早く死に、次男の章仲が蒲松齡と「同食」した

わけであるが、その理由は、韋仲の子が八人あつて、七人まで生員となつてゐるが、これを蒲松齡が教へたのであらうと思ふ。

三

わたしは今年の誕生日を迎へると五十六歳である。蒲松齡には及ばないが、よく生きたものだと思ふ。学生には志異をそのロマン性のゆゑに読めとすすめたが、わたし自身はもう愛読することもないだらう。「蒲松齡集」二冊を買つたのはしかし二種の興味があつた。一はこの文人の経歴をよく知りたいとのことであつたが、手に入れるとも一つの興味の方が強くなつた。彼の六十五歳の作に「日用俗字」があることは既述した。これは開いて見ると、荘農雜字で、無学の人の用ひる字と音とがならんでゐる。これも興味ぶかいが、一層興あるのは俚曲集(下冊)のあとにつけられた「土語注解」である。僅か二十ページで「以見於本集為限」と注してゐるが大癡一怒貌、不依一不許、中一好、公母一夫婦といふやうに記されてゐる。これは疑もなく蒲松齡の生れ育つた山東省中部の方言——二六〇〇年代の——に相違ない。考へてみれば金瓶梅は志異に先だつこと数十年の万曆(一五七三—一六一九)年間の作で、同じく山東の土語が用ひられてゐるといふ(姚靈犀「瓶外危言」所収郭源新「談金瓶梅詞話」)。も一つ山東人の所作としては「緑野仙蹤」があるといふが、それはともかく山東省は滿洲へ流入する人民が多く、蒲松齡の七世の孫

孫人も瀋陽にゐた筈。そのせいで「農桑經」などと同じく山東からもち出された志異の原稿の前半が一九五一年、東北図書館に収められ、これにもついで影印本が出た。わたしはそれは見てゐないが、楊仁愷「聊齋志異原稿研究」(一九五八年瀋陽刊)によつて、その大体を知ることが出来る。楊氏は著者の民族思想に重点を置いてをられるが、蒲松齡の民族思想については、わたしはすでに結論を得たつもりである。彼の原稿に、清朝盛時にそのまま発表されたら処罰を受ける態の文字のあることは否定しないが、彼がもし生前刊行するつもりならきつといまの通俗刊行本のやうに書き改めたであらう。清の刑部尚書王士禛と同じくらる臆病だつたやうに思はれるからである。現に楊氏の示す原稿の写真にも大量の訂正が見られるのは、刊行のことを考慮してに相違ない。

序でながら清代の詩宗でもあつた王士禛(清の世守雍正帝の名胤禛と末字が同じなので、忌んで士禛、士正とも称せられるが、漁洋の号で知らぬ人はない)との關係は、士禛の生地がほど遠からぬ新城(いま桓台县)であつたので、相識の間柄であつたと思はれる。柴田天馬氏(前掲「聊齋志異研究」三四ページ)が指摘されるやうに、現行本には新城王士正貽上評と明記され、例言の第三項には

「先生精力を畢殫して始めて是の書を成す。初め就て王漁洋に正す。漁洋百千を以て其の稿を市はんと欲したが、先生は堅く与へなかつたので、評隲を加へて之を還へした。今刻して以て世に問ひ、並に漁洋の評語を附した云々」

といふ箇所は、わたしは見るを得ないが、志異卷二「俠女」の末尾に「王漁洋曰、神竜見首不見尾、此俠女其猶龍乎」、同じく「酒友」の末尾に「王漁洋云、車君灑脫可喜」。 「蓮香」の末尾に「王漁洋曰、賢哉蓮娘、巾幗中、吾見亦罕、況狐耶」などの評語が見えるのは、作者もしくは編者の仮作ではあるまい。さうだとすれば劇職にあつた王士禛の二度の帰郷、すなはち康熙十二年（一六七三）から十四年までのその母の喪の期間か、康熙二十四年（一六八五）から二十八年までの父の喪の期間のことであるに相違ないが、おそらく後の方であらう。王漁洋の詩名はすでに高く、二十八年正月には帝の南巡の途、召されて德州（いま陵県）に赴き謁してゐるのである。その大詩人におのが作品を愛せられたにも拘らず、稿を売ることを肯んじなかつたのみならず、往來の跡が蒲松齡集には見当らない。ただわづかにこれに与へた書が数篇あつて、その一には「前拙誌、蒙点誌其目、未遑繕写。今老臥逢窗、因得以暇自逸、遂与同人共録之、輯為二冊、因便呈進」とあつて文もしくは詩を見せてゐることを証し（志異だつたかもしれない）、また一では「送別」の詩を贈つたことを示し、一では淄川の康利貞なるものの漕糧の官としての不正を訴へてゐるから、相当に親しい交際があつたことを明らかにする。また「為新城王司寇漁洋先生徵畢母王孺人壽詩啓」といふのによれば、前述した畢韋仲の母王氏の壽詩を韋仲に代つて作つて王漁洋に示したことのやうである。その他にも劉世其に代つての書翰（二三三ページ）、畢際有に代つて

の返翰（二三一ページ）などが「蒲松齡集」に見えてゐるほか、王漁洋の父母妻の祭文をこれまた畢に代つて作つてゐることが明かにされる。従つて王漁洋もこれには特に目をかけたのであらう「題聊齋文集後」（四三〇ページ）なる一文が録されてゐるが、きはめて短かく漁洋老人拜題の署名によれば、師弟の關係ではなかつたやうである。王漁洋が亡くなる（康熙五十年辛卯五月十一日）、「五月晦日、夜夢漁洋先生枉過、不知爾時已捐資客數日矣」と題する四首を作つた。その第二首は

遙憶馬頭已珥貂 遙かに憶ふ黒頭にして已に珥貂

相逢快語徹清宵 相逢へば快語 清宵を徹す。

角巾歸後羊裘老 角巾もて歸りし後 羊裘老い

芒屨辦成李杜遙 芒屨 辦じ成りて李・杜遙かなり。

訃乍聞時驚欲絕 訃たちまち聞く時 驚きて絶えんとし

懷無傾処恨難消 懷 傾くる処なく恨消し難し。

衰翁相別応無幾 衰翁 相別る応に幾もなかるべく

魂魄還將訂久要 魂魄はたもつて久要を訂めん。

とあつて、弔詞の常で、巧みではないが、徹夜語りあふ夢を見てもふしぎでないくらゐ親しかつたのかとも思はせる。ただ近県で十一日に亡くなつて、晦日まで報せがなかつたとすれば、王漁洋の家人たちの蒲松齡を無視したことも、明らかではないか。

わたしは前述したやうに楊仁愷氏のごとく蒲松齡を民族主義に徹した人のやうには思はず、志異のロマン性にもう別

れを告げた。しかし彼の全集や、これに収められてゐない「醒世姻縁伝」によつて、康熙の山東土語の収集が出来たらとの念は強い。「醒世姻縁伝」は松枝教授のいはれるやうに可厭らしい本だが、これや俚曲集が土語で充満してゐることはたしかだから、わたしはひまを見つけたら読み、かつカードを取るつもりである。戦争中に滿洲語と呼ばれてわたしたちをいぶからせた「東北の方言」の原語がその中にありはしないかと思ふ。なに「山東方言」といふ本を見つけてよめばいいぢやないかといふ人があるかもしれないが、それは言語学のしらうとである。古い形がのこつてゐるほど比較には適當なのである。ただしいつからカードをとり出すか、それは学年末多忙の爲まだ確言できない。他人がやつてくれればもちろんありがたいことである。それを期待してまとまりのないこの文章を書いた。

(注) 楊仁愷氏によるとその移住は同治年間のことである。また 価人の子英灝は清の盛京將軍依克唐阿の幕中にゐて、はじめ 志異の上函四巻を將軍に借し、ついで下函ととりかへたとこゝろ、一九〇〇年の北清事變で依克唐阿が病死し、原稿もどこかへ行つてしまつた由である。なほ九世の孫蒲文珊が残存の大部分をもつて西豊県にゐたが、一九四八年こゝが中共軍の手に入ると、同志たちの努力で原稿の上半が発見されたといふ。平井国手の本には蒲松齡みづからの定めた子孫命名譜といふのがあり、竹立一庭、上国人英、文章先業となつてゐる。英灝、文珊の輩行は徒つて正しくこれにあつてゐるが、平井氏

が昭和十一年蒲川で会はれた八世の孫英春は、渡瀧以來五十年で嫡統と稱し、四子文興・文魁・文学・文閔のうち、次男文魁を数年前から蒲家荘に帰り住まはしめてゐたといふ。ただこの家には遺稿はなく別家の価人（英春の父は人禹と人字が上につく）の家には伝はつたのである。